

まずは入社当手を振り返ってください。私が日本アイ・ピー・エムに入社したのは、1973年11月です。そのころはコンピューターというと、大きなホスト・コンピューターしかありませんでした。そういうホスト・コンピューターの時代から、ホストのOS (Operating System)などに携わりました。また、オフィス・コンピューターが出てくる少し前に分散処理マシンというのがあったのですが、ホストと分散処理マシンと端末という3階層の構造も経験することができました。

当時は、メモリーも今のように贅沢ではなくて、大きなマシンであっても512Kバイトの時代です。できることにはいろいろと制限があり、苦勞しました。印象に残っている仕事は、製造業のお客様の新しい生産ラインをつくったことですね。数カ月間、毎週出張して、生産ラインの制御システムをつくりました。お客様と一緒に成長していく時代でした。私も製品の成長とともに育ってきたようなものですね。

その後、5550の時代になり PC (Personal Computer) の時代になってきました。私は LAN (Local Area Network) や OS/2® にかかわってきました。OS/2は、金融業から製造業まで、いろいろな業種に入りました。私は、お客様の技術的なサポートや、アドバイス、デザインをやっていましたが、時代は次第にPCの時代になってきました。

そこで、OS/2をアプリケーション構築の基盤にしようと思いました。アプリケーションをホストから分散処理に落として、さらに、もっと下に落としてPCでやれるようにしよう。しかし、結果としては成功はしませんでした。アプリケーション・プラットフォームにするという夢はかないませんでした。

それ以降、転機になった仕事は、

1991年から1996年までの5年間、テキサス州のオースティンにある、ITSO

(International Technical Support Organization) に、自分で仕事を見つけアサイニーとして赴任しました。ITSOというのは、基本的に製品の開発研究所のすぐ近くにありますが、そこでは、全世界から1~2カ月単位で人を集めて、新製品をじっくりと使わせて、『レッドブック』という本にまとめるプロジェクトを行っています。これは単なる仕様書ではなく、ユーザーの目から見て評価して、その使い方のノウハウを一冊の本にするというプロジェクトです。当時、OS/2を取り巻く環境は厳しいものがありましたが、それでも頑張つて、5年間で10冊くらいの本を出しました。

1996年に帰国すると、ついにOS/2は受け入れられないだろうと言われました。そのころはWindows NT®ベースで、分散システムを構築しようするお客様が増えてきた時代でした。自分としてはある程度、敗北感がありましたね。良いアプリケーションをつくるプラットフォームのターゲットがなくなったわけですから。

しかし、1998年ころに、WebSphere® というものが出るという話が聞こえてきた。これは、Java™をサーバーとして、プラットフォームに使うことによって高速に動くサーバーの構造をつくるというものでした。これこそが自分が一度失ったホスト以外のアプリケーションのプラットフォームであり、同時に、お客様も望んでいると思いました。幕張のISE(日本アイ・ピー・エム システムズ・エンジニアリング)に「これは絶対に力を入れるべきだ」と提案したら、「じゃあ、君がやってほしい」と言われましたので、そのグループのリーダーになりました。1999年の1月から始めて、WebSphereはあっという間にメインストリームになりました。これは大きな成功だったと思っています。

WebSphereを広げていく上で重要な点は何だったのでしょうか。

これまでSE (System Engineer) というと、製品の機能の足りないところを、いろいろと工夫したり、お客様のアプリケーションとか環境とか運用の形態などを変

情報技術の匠

PROFESSIONAL

第25回
WebSphereを未来に導く匠

今回の「匠」では、IBM WebSphere®の国内普及に最も貢献した人物、清水敏正に登場してもらった。現在、清水はWebSphereアーキテクトとして、WebSphereの開発にワールドワイドでかかわっている。さらに国内では、大手企業の基幹系システム再構築という巨大なプロジェクトにも携わっている。そんな清水敏正に、国内のWebSphereの「これから」次世代のエンジニアへの「メッセージ」など、実にさまざまなことを語ってもらった。

えたりして、システムをつくってきました。

とはいえ、製品の機能そのものは開発部門がつくっている間に決まってしまう。当たり前のことですが、コードを書く前にアーキテクチャーをつくっているのです。その段階で機能が決まってしまうのです。それはオースティンのITSOに5年間いても、おぼろげながらしか分かっていなかったのですが、帰国してから明確に分かってきました。そこでSEは、開発部門がアーキテクチャーを決める段階から現場に入っていく必要があると思いました。

しかし、日本ではお客様と開発部門に「距離」がありました。米国のお客様がうまくいっているのは、開発の人と直接、電話で話すことができるからです。開発の人も直接、お客様のところに行って、要望を聞いて、「なるほど。今度、こういうものをつくりますから、これでどうでしょうか」となる。そういう会話が、国内のお客様に対しては一切ありません。それをなんとかしたいと考えたことが、1999年1月から始めたWebSphereの仕事の中でも、自分に

とって一番、重要な仕事ですね。しかし国内では、製品がお客様のご要望に満たないとき、「そこを直してよ」というチャンネルができていませんでした。そこで自分が、製品のデザイナーとお客様を結び付ける役割をやろうと思いました。お客様の代わりになって、「ここがよくないから、こうしてくれ」という役割です。お客様が要望する機能を、本当につくれる会社であるかどうか大切です。単なるメッセージではなく、技術者として開発部門とコラボレーションしてきた5年間でした。

次に成し得たいことは何ですか。

この年になると「日本人」としての意識が出てきました。私は、国内にWebSphereの重要な開発を少しでも持ってきたいと考えています。そして、開発の段階から、国内のお客様の声を製品に盛り込むと、いうことをやりたい。

私は、大和ソフトウェア開発研究所に、WebSphereの実行エンジンの一部の機能でも持ってきたいのです。英国IBMも重要な機能の一部の開発を受け持って

います。日本人も優秀なのに残念です。確かにIT教育という部分では、インドと中国が進んでいるというのは分かりますが、何か寂しいですね。

次世代を担う若いエンジニアに向けてメッセージを。

日本にWebSphereの実行エンジンの一部のミッションを持ってるのが難しいのならば、オープン・ソースのエリアで、いろいろな技術的な発案をしてほしい。「日本にこういうやつがいるぞ」という人が、どんどん出てくればいいなと思っています。

そのためにも、もっと英語力を付けてほしい。なぜならばオープン・ソースの議論の場は英語だからです。日本人は英語のディスカッションになると自分の意見が言えません。これは言語の問題だけではなく、文化や風習を分かっていないのも理由の一つかもしれません。会話についていける人はまれです。日本の教育を受けて、会社に入って、すぐに外国人と話せるかという、なかなかできないですよ。インドや中国の優秀な学生などと比べてしまうと、残念ながら、そこで差が付いているのかなと思います。もちろん、エンジニアはあまり英語が分からなくても、技術的に分かればいじょういのだという意見もあります。しかし、それでは自分の意見を言って、コラボレーションして、お互いに影響を与えて、何かを作っていくということには参加できません。さまざまな国の人と一緒にやりながら、「それだったらこの方が良いじゃないか」と意見を言えるようになる。言葉が分かり、会話できて、海外の文化や風習も分かる。若い人には、そういうことができるようになってほしいですね。エンジニアにとって英語で議論できることはNice to Haveではなく、MUSTだというように意識改革してほしい。でないと世界に追いつき追い越すことはできないと思います。



清水 敏正 (しみず・としまさ)

日本アイ・ビー・エム株式会社
ソフトウェア事業SWサポート&サービス
WebSphereアーキテクト

【プロフィール】

1973年、日本アイ・ビー・エム入社。入社後、SEとして、ホスト・コンピューター、分散処理マシンなどのシステム構築に携わった後、マネジャーやスペシャリストとして国内の製造業・金融業などへのOS/2の普及に貢献する。1991年よりテキサス州オースティンにあるIBMの部門ITSOに海外アサイニーとして赴任。1996年に帰国。1999年より、ISEにてWebSphereの国内普及に力を入れる。現在、WebSphereアーキテクトとして、ソフトウェア事業SWサポート&サービスに所属。